

私と日赤病院

「頑張って!!」に励まされ

阿部 治夫 会員

わが家の居間に、日やけて少々変色した二枚の色紙が掛けてある。今から十五年前、突然呼吸不全で日赤病院に入院、九死に一生を得て退院したとき記念に書いてもらった奇書である。

一枚は、生死の境を彷徨った時懸命に励ましてくれた救命救急センターのナースの皆さんのもので、あとの一枚は人工呼吸器を使う訓練してくれた西病棟五階のナースの皆さんのものである。色紙には、入院中に読んで感銘をうけた遠藤周作の小説の一節。無駄もなく区別も差別もない公平さが看護の原則である。そして行った看護は親切に優しく。実際に注射・採血・笑顔・愛情のこもった様々な行為を全身で表現。それらをひたすらやり続ける。最後に「頑張っ

てね」とつけ加えるのを忘れない」という名前に、ナースの皆さんが激励の言葉を添えて署名をしている。あれは阪神淡路大震災発生の一ヶ月程前から、風邪をひき最寄のクリニクに通院していた。その頃から夜明けごろになると、苦しさと動悸に目が覚める日々が続いていた。震災の二日前、何時ものように悪寒と息苦しさが目覚め居間で呼吸を整えていると、咳といつしよに突然熱いものが込みあげ吐血してしまった。初めてのことなので驚きのあまり茫然としていると、早く病院に」という妻の叫ぶ声でわれに返った。

一刻も早く病院へとの思いで、救急車やハイヤーを呼ぶ時間を惜しみマイカーを走らせて日赤病院の救急救命

センターに向かった。夜間待合室には、祭日の早朝にもかかわらず十数人の患者が診察を待っていた。医師の診察の順番がくるのを長く感じながら、睡魔と闘った。ようやく自分の診察が始まって数分後、医師がただならぬ様子で緊急入院の必要を指示した。医師は、「呼吸不全による低酸素血症と高二酸化炭素血症の疑いがあり一刻の余裕もない状態である」と告げられた。

医師の説明後、意識が急激に遠のいていくなかで、酸素吸入器の装置されたストレッチャに乗せられ、数人のナースに駆け足で病棟へ運ばれた。病室のベットに運ばれてから簡単な診察がなされた後、意識の混濁している私に代わって、妻から患者の傷病歴や今回の入院までの

経緯等できるだけ詳細に説明した。医師は一通りの説明を聞くと、祝日休診日にもかかわらず、前記クリニクから分厚いカルテを取り寄せて今後の治療方針を策定してくれた。医師は、患者の肺活量が標準の三分の一以下であることを確認し三項目の治療方針を立てた。

集中治療室に移し二十四時間体制の治療をする。酸素吸入の使用は避けて、人工呼吸器を使用する。人工呼吸器は、適正量の換気に配慮する。意識を回復したのは、あの阪神大震災直後の一月十七日午前九時頃であった。二日間

は全く記憶を失ったまま、救命救急センターのベットに横たわっていたことになる。暗くて長いトンネルをものがき苦しみながら、やっと明るいとこ

ろにたどり着き目が覚めた。ここは何処なのか、いま何をされているのか、見当もつかないままに、ぼんやりと部屋の中を目で追った。少しずつ意識が回復するにしたがい室内の様子がはつきりしてきた。大きな病室には何台ものベットが並び、数人のナースが緊張した面持ちで忙しく立ち働いていた。壁側の高いところに備えてあるテレビが目に入った。ただならぬ画像が映っていた。ビルや高速道路の橋脚などが延々と無残に破壊され、未だかつて見たことのない惨状である。関東大震災か東京大空襲の戦災跡のような惨状である。阪神淡路大震災発生時の映像であった。

医師の説明によると呼吸不全に陥った患者は、低酸素血症や高二酸化炭素血症を発症し、種々の臓器障害をまねき生命が危険におちいる。適切な判断の上、スपीディーな処置を施してくれた担当ドクター、文字通りの献身と「頑張って」の励まし、ナースの叫びは、今も脳裏を離れない。幸いに危機一髪のところで一命を取りとめた。

この日から妻と人工呼吸器を伴侶にして、私の第二の人生は始まった。そして古希もすぎ、あれから十五年の歳月が流れた。今は、年齢を重ねることの面白さを満喫している。毎月一度は病院に通い、内科や耳鼻科の医師、医療技師等多くの皆さんの笑顔と親切に励まされて職業生活、家庭生活の日々を送っている。皆さん有難うございました。

次回からは北見日赤の入院体験を基に局長らしい紙面創りになると思います。

ご期待下さい。

事務局長兼「オホーツクの風」編集局長が元気で退院する日を心待ちにしております。

3月中頃の夕方、谷川代表から電話があり、当会の事務局長が救急で北見日赤に入院したとの知らせです。については事務局長に替わって会報作りの部分を引き受けて欲しいとの事です。会報作りは初めて、さ大変。DTPソフトは「朝刊太郎」を使う事になりました。春まだ遅いオホーツクの美しい風景に臨時列車を取り込もうと、清水町止別の丘陵から俯瞰で撮影した。それが一面の写真です。第2面は阿部会員の記事で上手く収まりました、ありがとうございます。

(逢坂記)

編集後記